

小諸は足腰の強い人を育てる

東京小諸会 常務理事 小宮山 栄

私は20才まで小諸で育った。たまに東京小諸会で懐かしさを語りあうが、日本や世界に向かって語れる小諸の一番の地理的特徴ってなんだろうか。

長野県の特徴を一番わかりやすく教えてくれたのは何と言っても「信濃の国」の歌であり、これを憶え、歌えればこの県人より誇りを持つると思う。

歌詞に「北に犀川、千曲川」とか「浅間はことに活火山」などがある。

しかし、最近、小諸出身の者として「松本、伊那、佐久、善光寺、四つの平は肥沃の地」の歌詞が非常に気になり引かかっているのである。

平らな松本市、伊那市、佐久市、長野市は肥沃な地となっており、平らが良いんだと歌われており、坂の街小諸ははずされていのである。最近、特に小諸ほど坂だらけの街は珍しいと思うようになった。

たまに小諸へ帰り、一番高い浅間山から一番低い千曲川までをみると、街全体が斜めになっていて平らなところはない。

住宅も斜めのところに建てざるを得ない。学校へ通うのも行きは上りだけ、帰りは下りだけというケースが多い。小諸の街は長野県の中でも極めて不便な坂の街だったと思う。

しかし、不便な街で育った人間ほど、人間性は豊かになるものではないか。今の生活は便利すぎる。不便な生活もいいのだ。

3・11後に計画停電もあつたが、我々は口ウソクの生活も体験出来たし、今年の夏は電気使用量を2割減らそうと、不便を味わっても身体を適応させる気になったと思う。

私の小諸の家には今も強い信念を持っている小山亮さん（小諸出身の実業家、当時代議士）が45年ほど前に書いた色紙「嵐は強い木を育てる」が飾つてある。

私の小諸時代は、皆、貧乏で冬は極めて寒く、しかも毎日の上り下りを歩いて育つた。現在私は平らな川口市という街で生活しているが、今でも足腰は強い。それは単に歩くだけでなく、毎日、かなりの段数の階段を上り下りしているからである。仕事場では一階、二階の工場から三階の事務所まで、駅ではエスカレーターをほとんど使わない。71才であるが、「腰痛なんてくそくらえ」である。私にはこれが誇りである。

小諸を含めた「日本三大坂の街」はどこだろう。また「世界三大坂の街」はどこだろう。姉妹都市になったら面白い!!

人は皆、便利な平らな街へ移動し、街が出来たと思うが、我々の祖先は不便でも小諸という坂の街を作ったのはなぜだろう。

本のご紹介

「歌う国民」

渡辺 祐 著
中公新書

県歌「信濃の国」も詳しく紹介

著者は、文化資源学・美学芸術学を専門とする東大教授で、や、アカデミックで固い感じのする本ですが、内容は身近の歌、日本人の「心の原風景」として愛唱されている唱歌、校歌、県歌、社歌、労働歌などについて書かれており、拾い読みしても面白く読めますが、その一助として、本書の目次の中から面白そうな項を幾つか拾ってご紹介します。

*第一章中の「国民づくり」のツールとしての音楽。

*第二章中の「国民づくり」の切り札としての唱歌。

*第四章中の「仰げば尊し」から「旅立ちの日に」。

*第五章中の「儀式唱歌と校歌」。

*第六章中の「県歌は歌われない」と「信濃の国の奇蹟」。

*第七章中の「社歌と工場音楽」「うたごえ喫茶」等の項は身近で面白いと思います。

著者は、序文の「はじめに」のなかで、「一見、浮き世を離れたところにあると思われる唱歌などの音楽も、実は近代的な国民国家形成のプログラムの中に組み込まれていたのだ」という観点から、それらの歌の成立や展開の過程について述べており、そのためこの書の書名が「歌う国民」となった

のではないかと考えられます。

紙数の都合で「県歌」の部分に筆を絞ってご紹介しようと、著者は「どこの県でも県歌があまり歌われていない中で、例外的によく歌われている、というより県民であればほとんど皆がそらで歌える、驚くべき県歌が長野県の県歌「信濃の国」だ」というのです。何故か。

この「信濃の国」は、「各県の県歌の中でも飛び抜けて古いもの」で、「何と一九〇〇（明治三三）年に作られています。」そして、この「信濃の国」という曲は、「他の県歌とは全く違う地理教材としての性格を濃厚にもっている。」即ち「信濃の国は十州に」ではじまる一番と二番では、県内各地の全体的な位置と自然が描かれるのに続き、三番では「木曾の谷には真木茂り、諏訪の湖には魚多し」と県内の産業経済が、さらに四番では寝覚め床などの名勝、五番では木曾義仲、佐久間象山などの歴史的人物が歌われ：「といったように県全体を統一的な観点で見渡す「系統地理的アプローチ」で歌いあげているところが、南北「異なった集団の寄り集まりの性格が強かった長野県の場合には、適していた」という人もいると、著者は指摘しております。

また、よく歌われたのは「曲が優れているからではないか、という意見もありそう」と著者は言います。

作詩者は、松本出身で明治三二年当時長野師範学校の国語漢文教師の浅井冽（きよしとも通稱）で、作曲者は明治三二年一月に同校に音楽教師として赴任して来た

北村季明^{すえはる}で、北村は東京音楽学校を卒業した東京人で、赴任の年の翌々明治三四年二月には退職して東京へ戻り、その後は歌劇などの作曲で、日本を代表する作曲家の一人として活躍し、大きな功績を残しています。従って、北村の長野在任は一年とちよつとで、その間に「信濃の国」を作曲しているので、「長野県人にとっては全くの僥倖だった」としか言いようがありません」と著者は言っています。

歌劇といえば、「信濃の国」も、長野師範で北村と同僚だった体操教師の山田春耕^{しゅんこう}の振付けで、遊戯に仕立てられ、学校の運動会の際などには広く踊られました。

このようにして成立した「信濃の国」が、寄り合い世帯的な長野県民の中に浸透して行った結果、戦後分県論のやかましかった「一九四八（昭和二三）年には、南信側の提出した分県案が県議会で採決されることになり、賛否が拮抗し白熱の戦いとなったのですが、このとき、傍聴席から「信濃の国」の大合唱がわき上がり、それをきっかけに採決が延期されることになって、結局分県の話は沙汰やみになったというエピソードも」あるとのこと。

そして、「一九六八（昭和四三）年二月白馬で行われた冬期国民体育大会のときに、この歌の合唱に観客たちが自然唱和してゆく光景をみて、他県から来ていた人々が驚き、話題になったことがきっかけ」となり、「後付けで県歌に位置づけられたと言った方が正しいようです」と著者は言っています。

東京小諸会 副会長 高橋 昭平

千曲川と浅間山に抱かれた 小諸市街を望む

小諸大橋の近く、そば屋菖蒲庵の庭から



提供 小諸市観光課